SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

漁師を取り巻く制度と実践：なぜ今、海を相手に生きるのか

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学コース 公開日: 2022-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤池, 泰輝 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00028556

漁師を取り巻く制度と実践

～なぜ今、海を相手に生きるのか～

赤池泰輝

1　はじめに
2　漁業協同組合の存在
　2.1　清水漁業協同組合
　2.2　興津地区における戦後以降の沿革
3　興津周辺の漁種と変遷
　3.1　シラス漁
　3.2　サクラエビ漁
　3.3　その他の漁
　　3.3.1　刺し網漁
　3.4　警戒船
4　興津に住む漁師たちの語り
5　考察
6　おわりに
7　謝辞

1　はじめに

本章では、様々な面で逆境に立たされながらも海の上に居続けようとする静岡市清水区興津地区（以下、興津）を拠点とする漁師の姿や、そのために様々なレベルの人間関係を駆使しながら生存戦略を実践している現状や海を相手に仕事を続けることの意味について論じていきたい。

私は当初興津では漁業はおこなわれていないものだと考えていた。というのも、海沿いを走る国道一号線や東海道線からはおおよそ漁港というものが存在しているようには見えなかったからである。興津の海岸線は興津川河口付近のわずかな浜とテトラポッド、そして清水港の興津埠頭がすべてを構成している、というのが私の思い描いていたイメージだった。しかし調査を進めていくとすぐに、興津以外の漁船に所属して漁師をやっている人がいることがわかり、そのような道に進んだ経緯や仕事の形態に対して興味が湧いた。そ

して実際にフィールドワークで調査を進めていくうちに、不漁をはじめとした困難に見舞われつつも何とか漁師を続けていこうとする姿や、漁協に所属しつつもそこに縛られない複数の関係が存在する様子がみえてきた。

そこで本章では、まず興津の漁師たちが所属している清水漁業協同組合（以下、清水漁協もしくは漁協）や由比港漁協組合（以下、由比漁協）における漁をはじめとした制度について述べる。そして興津や清水漁協という単一の所属にこだわらず、様々な陸の地点から海という一見境界のないフィールドへと繰り出していく漁師の姿や、そこで必要とされ生み出されていくヒト・モノを介したつながりや制度に着目する。

本章の次節以降の構成は、以下の通りである。第 2 節ではまず興津周辺の漁業を管轄する清水漁協の概要や興津における漁協区分を取り上げる。第 3 節では、清水漁協及び由比漁協で営まれる漁や仕事について述べ、第 4 節では漁師を生業とする人々の事例や実際の漁の様子について記す。そして第 5 節では第 4 節までで述べた事項をもとに考察をおこなっていく。

2　漁業協同組合の存在

この節では、興津における戦後以降の漁業の沿革について『興津三十年史』（興津地区誌編集委員会編　1992）を参考にしながら、興津における漁業協同組合について記述する。その前に、現在興津の漁業を管轄している清水漁業協同組合について、清水漁協での聞き取りをもとにまず記述していく。

2.1 清水漁業協同組合

清水漁業協同組合は興津地区東端の薩埵峠から用宗漁港の漁区までを管轄する組織であり、支所として清水漁業協同組合用宗支所が存在する。

組合員は基本的に管轄域で漁に従事する漁師たちである。主に水産業協同組合法に基づいた各種業務[3]をおこなっており、その内容は経営及び技術の向上に関する指導から物資の供給や共済に関する事業まで多岐にわたる。2009（平成 21）年には、当時多くの負債を抱えていた静岡漁業協同組合が清水漁協に負債を除く全事業を譲渡し、これにより清水漁協は用宗漁港における各種事業もおこなうようになったとのことだった。

---

[3] e-Gov 法令検索「水産業協同組合法」
（https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=323AC0000000242）
より 2021 年 10 月 21 日参照。

2.2 興津地区における戦後以降の沿革

興津では戦前から興津町漁業協同組合（現・清水漁業協同組合）が発足していたが、戦時中には戦時下水産団体法の下に興津漁業会となっていた。1949（昭和 24）年、水産協同組合法の施行にともない漁業会は解散し、改めて興津町漁業協同組合となった（興津地区誌編集委員会編 1992：351-352）。

1961（昭和 36）年に興津町と清水町（どちらも現・静岡市清水区）が合併した翌年、管轄海域内の漁業権について変更申請をおこない、変更免許制となっている。これは興津第一埠頭（以下、第一埠頭もしくは興津埠頭）建設にともなう漁場縮小のためであった。そして 1964（昭和 39）年の臨時総会で、興津漁業協同組合は清水市漁業協同組合との合併を正式に決議、清水市漁業協同組合興津地区[4]と称することになり、事務所として興津支所を設けた。この時点では興津海岸という浜があり、興津漁港として使用されていた。漁師たちはここに乗り上げることで漁船を係留していた（興津地区誌編集委員会編 1992：352-354）。

1965（昭和 40）年には、興津第二埠頭（以下、第二埠頭とする）に漁船溜り（写真 1）が完成した。これは第一埠頭・第二埠頭の補償として作られたものである。そして 1972（昭和 47 年）、国道一号バイパスである静清バイパスを建設することとなり、興津海岸を埋め立てた。このため興津の漁師たちは第二埠頭の漁船溜りを本格的に使用するようになり、現在に至る（興津地区誌編集委員会編 1992：355）。

写真 1　第二埠頭の漁船溜り。奥に見える道路は静清バイパス（赤池撮影）

このような経緯を経て、興津の漁業区分は名実ともに「清水漁協の一部」という扱いになっていった。そしてこのような区分がなされてから実に 57 年もの月日が経ったことをふまえると、余計に興津を独立した区分として考えることは難しいと思われる。実際に漁師の

[4] 2003 年に旧清水市が静岡市と合併、静岡市清水区となった際に清水漁業協同組合に組み込まれた。

人々の話を聞いていても、一様に「興津の漁師」というよりも「清水漁協の漁師」という立場のほうが話しやすいようにみえた。

また、過去の興津ではシラスだけではなく、マグロやカツオなどの遠洋漁業もおこなわれていた。しかし燃料価格の高騰などの要因により遠洋漁業をおこなっていた船は 1970 年代終わりには姿を消し、以降はシラスやタチウオなどの沿岸漁業が主力となった（興津地区誌編集委員会編　1992：361-364）。これらも後継者不足や漁獲量の減少によって次第に姿を消し、現在ではシラス漁船 3 隻と数隻の釣り船を残すのみである。

ここまで、興津を取り巻く漁業区分について述べてきた。繰り返される漁協の併合により漁協そのものの規模は拡大してきた一方で、併合から半世紀も経ったことから世代交代も進み、現在の漁師たちの「興津の漁師」という認識は薄れてしまっていることがうかがえる。

次節では、漁の内容そのものの変遷について詳しく述べていく。

3　興津周辺の漁種と変遷

現在、興津周辺はシラスとサクラエビが主な漁獲対象となっており、清水漁協に所属する漁師の大半はこの 2 種類の漁を中心に生活を営んでいる。

この節では、清水漁協所属の漁師の仕事の内容について紹介していく。サクラエビ漁に関しては『駿河湾桜えび物語～駿河湾の名物 120 年の歴史を紐解く～』（川口・ 仲田 2013）を参考にしながら説明をおこなう。

3.1 シラス漁

江尻でシラス漁船を営む中塚さん（男性、４０歳）によれば、清水漁協内には二つの漁法が存在する。一つは二隻で網を引く二艘曳き、もう一つは単独で網を引く一艘曳きである。二艘曳きはシラスを大量に獲ることができる分、シラスの身が圧迫されたり長時間網を引いたりする影響で鮮度や身の綺麗さが落ちる。一方で一艘曳きの場合は漁獲量こそ少ないものの、ゆえにシラスの身が圧迫されないため傷つきにくく、さらに短時間で引き上げるため鮮度も落ちにくいというメリットを持つ。用宗では二艘曳きを採用している一方、清水側では一艘曳きを採用している。

シラスの販路については、大きく二通りに分けられる。一つは一旦静岡市駿河区用宗（以下、用宗）の用宗漁港に併設されたシラス専門の市場（以下、シラス市場）に持ち込みそこで買い取ってもらうという方法であり、シラス市場に一度買い取ってもらうことで様々な保険に入ることができる。漁獲量が少ないときや加工しきれないほど獲れたときの余剰分はそのままシラス市場が買い取り、自家加工できる範囲で多いときや高値で売れそうなときは自分で買い戻し、自家加工して市場価値を上げて売るなど状況に合わせた対応

ができるのがシラス市場を介するメリットである。一方で市場価格によって売り上げが左右されやすく、自家加工する場合はシラス市場の設定する価格で買い戻すことで余分な費用が上乗せされることがデメリットだといえる。

もう一つが、用宗のシラス市場を通さず自分で加工から出荷・販売までを手掛ける方法である。市場を通さない分高い利益を得ることが望めるが、保険に入ることができないために不漁時に不安が残ることや、シラスを確実に売り切れるだけのブランド力や人気、販路の確保が必要となってくる。以前はこちらが清水漁協のシラス漁師がおこなうスタンダードな販売形態であった。なお現在ではほとんどの興津のシラス漁師が前者の方法を取っている一方で、江尻所属のシラス漁船はほとんどが市場を通さず加工・販売しているとのことだった。

漁獲量はある程度の増減はあるものの、2012（平成 24）年度に 28.0 t のピークを迎えたあと徐々に減少し、2020（令和 2）年度には 11.7 t まで減少している[5]。

現在清水漁協内では、静岡市清水区内の江尻・横砂・三保（以下、それぞれ江尻・横砂・三保）・興津の 4 か所に係留する施設があり、合計 13 隻（江尻 3・横砂 6・三保 1・興津 3）のシラス漁船が活動している。

また中塚さんの所有する熊吉丸で従事する河本さん（男性、42 歳）によれば、乗組員は基本的に清水漁協からの斡旋によって配属されるという。配属後はあまり船を降りることはないが、船を変えたい場合は異動の希望を漁協に出しておき、ほかの船に空きが出るとそちらに移る機会をうかがうことになるとのことだった。

3.2 サクラエビ漁

サクラエビ漁の解禁期間は、春漁は 3 月 25 日から 6 月 5 日前後、秋漁は 10 月 25 日から 12 月 27 日前後となっている。ただし後述する資源保護もあり、漁ができる日は 30 日程度である。サクラエビの移動に合わせて、春漁は駿河湾奥部、冬漁は湾西部で漁をおこなう。昼間サクラエビは水深が深い場所にいるが、夜になると水深 20～50mまで浮上する。このような生態から、サクラエビ漁は夕方に出航、夜間に網を掛けるという方法を取っている。シラス漁と時間帯が被らないため、清水漁協に所属する漁師はほとんどがサクラエビ漁に従事している。

サクラエビ漁は始まってから 120 年程度と歴史は浅く、1894（明治 27）年、由比の望月平七と渡辺忠兵衛がアジ漁に出かけた際に偶然サクラエビが大量に獲れたことが始まりだといわれている。サクラエビ漁が本格化したのは明治後期からだが、昭和初期になるまで小型の木造船が使われていた。動力は人力と帆という非常に頼りないものであり、冬場の無動力船での漁は寒さとの戦いであった（川口・ 仲田 2013：10-12）。船の動力化が始まったのは昭和初期からであり、動力化と並行して漁具の改良も進んだ結果、乗り子の数

---

[5] 年度別漁獲量等は松井 2.3 を参照。

も半分になった。その後も無線機、網深度計、GPS やフィッシュポンプなどの導入が進んだ。こういった数々の改良が、乱獲やそれにともなう価格の下落も引き起こしてしまうようになったのが昭和 50 年ごろである。結果として、1977（昭和 52）年から漁獲量の売り上げを参加した漁業者たちで均等に配分するプール制度が導入された。現在は由比・蒲原・大井川の全サクラエビ船 60 統 120 隻がこの制度に加入している。配分としては総売り上げ代金を 60 分割し、統単位でまず配分、その後船主が 50%を取り、残りの 50%は乗組員の数で割った金額を取り分としている（川口・ 仲田 2013：27-34）。統とは漁を共同でおこなう複数の船からなる船団のことを指す。

また、近年は漁獲量の減少が著しく、特に 2018 年の春漁では前年に比べて 7 割近く減少している。これを受けて 2018（平成 30）年度の秋漁が見送られたり、出漁日を少なくしたりといった資源保護のための対策がなされている。

基本的には、サクラエビ漁船は由比・蒲原と静岡県焼津市の大井川漁港（以下、大井川もしくは大井川漁港）、いずれかの港に所属している。しかしあくまで所属とはサクラエビを水揚げする場所のことを指す。そのため、水揚げは由比や大井川でおこなうが、実際は横砂や焼津市の焼津港に係留している船が一隻ずつ存在する。このうち横砂に係留している船が後述する共清丸である。

興津でシラス漁を営み、由比のサクラエビ漁船でも働く林真弘さん（49 歳、男性）によると、サクラエビ漁船の乗組員は基本的に船主が自ら探すという形式になっており、漁協が紹介することはほぼないという。よって基本的には地元の知り合いなどが乗組員を構成しがちだが、季節性のある仕事で参入しやすいという面もあり、静岡県富士宮市や山梨県身延町、果ては福島県から働きに来る人もいるという。また以前豊漁だったときには、興津に住む人でも昼間は違う仕事（ペンキ屋など）をしていて夜にサクラエビ漁をする、といった生活サイクルの人々が多数参入してきたという。しかし不漁になるとそういった人々は辞めてしまったとのことだった。

3.3 その他の漁

清水漁協内ではシラスとサクラエビ漁が主となっているが、シラス漁船がたまに刺し網漁をすることもある。ここではこの刺し網漁について聞き取りをもとに取り上げる。

3.3.1　刺し網漁

魚やエビが移動する進路に網を張り、網目に刺させる、もしくは絡ませて漁獲する方法である。季節によって獲れるものが変わり、取材をおこなった 6 月上旬ではマダイなどが獲れる。専門の船は現在興津や清水にはないものの、江尻でシラス漁船を営む中塚さん（男性、４０歳）によると、シラスが不漁の際にはシラス漁船が網を掛けることもあるという。ただしシラスがいないときはほかの魚も同様にいないことが多く、商業的側面は薄いとのことだった。

3.4 警戒船

警戒船とは、港湾工事などの現場で不審船の見張りや港内を航行する船の誘導といった仕事を担当する船のことである。河本さん（男性、42 歳）によれば、使用する船はシラス漁のものをそのまま流用している。乗組員の構成は、操舵手と誘導監視をおこなう乗り子の 2 人 1 組で、操舵手は通常時のシラス漁の操舵手と同じく船の持ち主が務める。一方で、乗り子は雇われる人が務めるため日によって変わり、漁の際の乗組員ではない場合も多いとのことだった。

警戒船の仕事は漁協が組合員に配分しており、漁に支障の出ないようなスケジュールで配分している。日雇いではあるが、事前に担当日が決まり、1 日である程度まとまった額が入るために収入源としては安定している。そのため漁師にとっては漁のオフシーズンや不漁の時の貴重な収入源となっている。また現在は興津で新たな港を建設している最中で、この建設現場での仕事が多いとのことだった。

興津に住む漁師たちは、シラス漁とサクラエビ漁、そして警戒船という 3 つの仕事を季節や獲れ具合によって少しずつ調整しながら生活している。これをふまえ、次節では 3 人の興津在住の漁師に焦点を当てる。そのうえで、長期的な不漁という環境に置かれながらも、漁に限らず様々な形で海とかかわりを持ち続けようとする漁師たちの姿を明らかにしていきたい。

4　興津に住む漁師たちの語り

この節では、実際に興津内外で漁師を営む漁師たちのインタビューについて記す。漁師としてどのように仕事を組み合わせているのか、そしてどのような態度で海に関わろうとしているのかという点について、特に注目していきたい。

＜事例 1　興津外の漁港でシラス・サクラエビ漁に従事する河本さん（男性、42 歳）＞

漁業に携わって 25 年となる河本さんは、現在清水所属の熊吉丸でシラス漁を、横砂所属の共清丸でサクラエビ漁に従事している。河本さんは生まれも育ちも興津であり、実家はスポーツ用品店を営んでいた。こちらは兄 2 人が引き継いで経営しており、河本さん自身は親元を離れて、妻と一人の子供と共に住んでいる。

河本さんが漁師を志したのは、16 歳で高校を中退し仕事を探すうちにマグロ漁船乗組員の募集があることを知ったのがきっかけだという。結果としてマグロ漁船には 1 年半乗っていたが、あまりにも激務が続いたために船を降りた。その後は清水漁協に所属し、漁協からの斡旋で 18 歳から共清丸でシラス漁に従事する一方で、由比のサクラエビ漁船にも

乗り込むようになった。しばらくはこの形態で漁師を続けていたが、シラス漁もおこなっていた共清丸の船主からの誘いでシラス・サクラエビともに共清丸で従事するようになった。その後熊吉丸で乗員の空きが出たことを知り、様々な面を考慮したうえでシラス漁では熊吉丸に乗るようになったという。

年間を通してみると、サクラエビ漁とシラス漁の期間が重なる 3 月下旬～6 月初旬と 10 月下旬～12 月初旬が比較的忙しいという。一方で熊吉丸は年内にシラス漁を終わらせるため、年明けから 3 月の解禁日までは警戒船の仕事を増やしているが、それでも暇な日が多いそうだ。また、近年は不漁の影響もあり、熊吉丸の「親方」（船主のこと、河本さんはこう呼ぶ）が週初めに船を出し、「しばらくシラスは獲れない」と判断するとその週は船を出すのをやめてしまう。そのためにここ数年の不漁に加え、興津新港の建設で需要が増大しているのもあって警戒船の仕事を入れる頻度が増えているという。実際、河本さんの取材自体は実習の約 1 週間前におこなったのだが、実習期間中はずっと建設現場で警戒船に乗るとのことだった。

河本さんが漁師として普段心掛けているのは、スマホのアプリやテレビで天気や潮流をこまめに確認することだという。基本的に 1 週間先までの天気や潮流は常に把握しているそうだ。休日やオフシーズンは酒を飲んだり庭先でバーベキューをしたりして過ごしている。その一方で漁の前日には酒を飲まなかったり、休日でもつい天気や潮流を確認したりしてしまうとのことだった。

河本さんは、今回取材したなかでは唯一興津の外の漁船でシラス漁に従事する漁師である。河本さんの事例からは、船主ではないためにある程度船を乗り換えることが可能であることや、海という仕事場に関わり続けるために日常の中で天気や潮流を把握したり断酒したりといった細かな努力を続ける漁師の姿を見ることができる。

続いて、他の仕事を経験したのちに漁師になった林さんの例をみていく。

＜事例 2　興津にシラス漁の漁船を持つ林真弘さん（男性、49 歳）＞

林真弘さんは今年で漁師になって 19 年目になる。眞生丸というシラス漁漁船の船主であり、由比のサクラエビの漁船にも乗り込んでいる。

林さんは生まれも育ちも興津で父親も漁師だったが、子供の頃は漁師を継ぐということは特に考えていなかった。実際に県外の大学に進学し、卒業後は大手電力会社に入社、県外を転々としていたという。しかしその中で「地元に戻りたい」という思いが芽生え、30 歳の時に会社を辞めて興津へと戻ってきた。これについて「本当は 26 か 27（歳）で戻ってくるつもりだったが、なかなかやめられず 30 歳まで遅れてしまった」と話してくれた。

地元に帰ってきた後も、特に漁師を継ぐということは想定していなかったそうだ。しかし地元で仕事を探している途中に成り行きで父の船に乗ることになり、そこでとりあえずシラス漁をやってみることに決めたという。その後 1 年間シラス漁を続け、「漁師として

やっていける」という感触をつかんだことで船を父から譲り受けて専業漁師となった。合わせて「人の船に乗るから迷惑かけてもいけない」ということで最初は受けなかったサクラエビ漁も始めることとなった。ちなみに現在乗っているサクラエビ漁船は、18 年前の当時の親方が父の知り合いであったためにその伝手で乗るようになり、現在に至るまで長い付き合いを持っているとのことだった。

現在眞生丸は林さんと父親を含めた 4 人の乗組員で操業しており、林さんが主に舵を握っている。また漁をおこなうだけではなくシラスの加工・直売や出荷もおこなっており、自宅前のプレハブで直売所を開いている。現在は買取り後に林さんが全量買い戻し、眞生丸の乗組員にも手伝ってもらい加工することが多い。ただ最近は不漁の時も多く自家加工しても採算が取れないため、そのまま用宗から買い戻さないことも多いそうだ。以前は自家加工が追い付かない分を用宗で買い取ってもらっていたそうだが、保険加入などの条件に全量買い取りが前提となっていたことから現在のような体制になっていった。また最近は少なくなってしまったが、やはりシラスがたくさん獲れた時は達成感を覚えるという。

シラスの出荷先は、現在では興津駅前の鮮魚店「魚吉」や清水の市場となっているが、以前は興津内外の小規模なスーパーなどにも卸していたそうだ。またネット通販などはやっていないものの、過去にたまたま店頭から買っていった遠方のお客さんから「また食べたい」と言われ、定期的にシラスを送っている人も何人かいるという。「このご時世ありがたい話だよ」と林さんが照れくさそうに笑っているのが印象的であった。

林さんの事例からは、船の親から子への引き継ぎ、サクラエビ漁船に乗り込んだりシラスの販路を確保したりする場合、やはり人脈が大きなカギを握っていること、そして自家販売という方法を取ることで顧客との密なやり取りが生まれていることなどが分かる。また自分がとったシラスにリピーターがつくことが、少なからずやりがいにつながっている面もうかがえた。

次は同じく親子でシラス漁船を経営する薩川さんの例をみていく。

＜事例 3　興津にシラス漁の漁船を持つ薩川正樹さん（男性、40 歳）＞

興津の船溜まりに係留された西宮丸の船主でシラス漁を営む薩川正樹さんは、父親である和義さんが西宮丸を持っていたこともあり、高校卒業後すぐに漁師の道を歩み始め現在に至る。漁に出るときは和義さんが舵を取り、正樹さんは主に魚群レーダーを見て網の投入タイミングを図ったり、網を引き揚げる際に指示を飛ばしたりといった統括的な役割を担う。

林さんと同じく自前の直売所を興津の船溜まり近くに持っており、シラスが不漁でなければシラス市場から買い戻し、自家加工して直売している。

正樹さんも由比の漁船でサクラエビ漁に参加しており、和義さんの知り合いの船に乗せてもらっているそうだ。和義さんは、また別の知り合いのサクラエビ漁船に乗せてもらっているという。一方で過去のサクラエビ漁については、「15 年位前にはサクラエビが良く

獲れて、日中はほかの仕事をしている人がどんどん参加してきた。その矢先に漁獲量が減りはじめて、漁師専業じゃない人はあっという間にやめてしまった」と話してくれた。

次に、薩川さんの船である西宮丸の漁に同行したときの様子について記述していく。

＜事例４　薩川さんの漁の様子＞

私が興津の船溜まりについた午前６時30分ごろには、すでに３隻のシラス漁船は準備を始めていた。漁師たちは漁具の準備や漁船への積み込みをおこないながら、時折船をまたいで会話をする。軽口や冗談、愚痴など会話の内容は様々である。

もうすぐ７時になろうかという頃、３隻のシラス漁船は一斉に船溜まりを出る。するとすぐ近くにある横砂所属のシラス漁船と合流し、その日に漁に出ている清水漁協内の漁船と無線で連絡を取りながらどこで漁をするかを決める。基本的にはおおよその目星をつけた場所を分担してシラスを探し、シラスが居た場合は無線で知らせてそこに漁船が集まっていく、というのがシラス漁の流れだ。

網の下準備が終わると、いよいよ駿河湾へと繰り出していく。といっても、この日眞生丸が選んだ場所は興津の海岸線沿いである。興津第二埠頭から興津の海岸線にかけて少し沖合に長い防波堤が存在するが、この日はこれを越えて沖合へ出ることはほとんどなかった。ただ、日によっては用宗との漁区の境近くまで迫ることや、駿河湾の真ん中あたりまでシラスを探しに出ることもあるという。

漁区に向かう途中も、正樹さんは魚群探知機から目を離さない。２人の乗組員も、いつでも網を入れられるようにスタンバイしている。魚群を見つけると、すぐに網が投入されたのちにスピードを上げ、魚群をぐるりと取り囲むように船を一周させ、網を引き揚げる。この際途中までは機械で引き上げるが、１人が網に水をかけ、もう１人が随時網に絡まったゴミなどを取り除きながらの引き揚げとなる。これもまたシラスを見つけたとき、速やかに網を入れることができるようにするためだ。やがて網がある程度回収されると、今度は手作業で網を引き揚げる。

シラスを船上に上げると、即座に大きなザルへと移され水切りされた後、青いプラスチックのかごへと移されて大量の氷で締められる。網入れからここまでの作業時間は大体20分強であり、シラスの処理をしている間にも、次のシラスの群れを探して船を走らせる。この日は一連の作業が４回続いた。最終的に獲れたシラスは８杯だったが、薩川さん曰く「全然獲れてない」とのこと。豊漁の時は入れられるだけ網を入れるが、獲れなければすっぱりやめてしまうという。この時点で、時刻は午前９時を回っていた。

その後船が停まり、正樹さんから「ほかの船からシラスを受け取るので、舷側から船の前に来てほしい」と言われ私は移動する。すぐに一隻の漁船が近づいてきて、次第に舳先に書かれた「眞生丸」の文字が判別できるようになった。林さんの船だ。二隻が横づけると、眞生丸の乗組員が西宮丸側へシラスの入ったかごを渡していく。正樹さん曰く、あまりに漁獲量が少なければ別の船にシラスを渡して自分は港に帰る、という光景はたまにあ

るらしい。ちなみにかごにはそれぞれの所属と船名が刻まれており、混同する心配はない。

シラスの受け渡しが終わると、すぐに眞生丸が離れていく。一拍遅れて西宮丸も進み始め、すさまじい速度を出しながら一路用宗へと向かい始めた。そんななか、正樹さんと乗組員は網と甲板の洗浄と整理を慣れた手つきでおこなっていた。シラスは生鮮食品であり、前日のシラスやごみなどが残っていると食品衛生上問題が残るため特に念入りに作業している、と乗組員の一人が話してくれた。

興津の海から用宗漁港までは、おおよそ 30 分弱かかる。到着後は重量を測定してもらい、シラスを買い取ってもらう（写真 2）。この日買戻しはせず、シラスは買い取られた後そのまま市場のほうへ送られ、代わりに前回の水揚げなどで使われた空のかごを渡されて船に積む。かごは西宮丸のものだけではなく、興津や横砂に所属する船の分も一緒に回収していた。

写真 2　用宗漁港でのシラス受け渡し（赤池撮影）

用宗港で給油したのち、西宮丸は興津へと舵を取った。帰りの船中で正樹さんと話をしているときに「調子がいいときは（かごに）36 杯とか取れてね。いろいろ大変だけど、こういうのがあるから漁師はやめられない」と嬉しそうに話してくれた。そのうえで息子に漁師を継がせることについては「させたくない。やっぱり不安定な職業だし、今みたいな不漁だとなおさらね」と少し寂しそうであった。

以上、三人の漁師たちの事例をみてきた。漁師になるきっかけは三人とも違えども、20 年ほど前というほぼ同じような時期に漁を始めている。シラスもサクラエビも、豊漁とまではいかないまでもそれなりに獲れていた時期を知っている。それゆえか、聞き取りの中でたびたび出てきたのは不漁に対しての諦めに近い愚痴であった。ただし、それを語る 3 人の表情はみな一様に「しょうがない」といった雰囲気の苦笑であり、誰も漁師をやめようかという話をする気配はなかったのが印象的であった。

次節では、ここまで述べてきたことを用いて考察をおこなう。一つの漁種にのみ携わるのではなく複数の仕事を組み合わせることで仕事を成り立たせている様子や、漁に携わるときに感じる「やりがい」などを切り口にして考察をおこなっていきたい。

5　考察

ここまで、清水漁協という所属のもと漁師たちが複数の仕事を組みあわせ、不漁をはじめとした数々の問題に悩まされながらも海と関わり続けようとする様子を 3 人の事例を交えて述べてきた。これらをもとに考察に入る前に、『興津三十年史』（興津地区誌編集委員会編 1992：372）に記述されている「興津地区の漁業者に関係する今後考えられる問題」を引用する。

一、沿岸漁業の有効活用
一、輸入水産物の拡大、食生活の変化への対応
一、漁業者の育成、確保
一、沿岸域の利用、開発への対応

現在興津ひいては日本の漁業が直面している問題は、おおむね 1992 年には認識されていたことがわかる。しかし結局のところ清水漁協管轄内の漁業は規模を縮小し、興津の船溜まりは 3 隻を残すのみとなってしまった。現在でも 1992 年当時に心配されていた問題は解決どころか悪化の一途をたどっているといっていいだろう。これは漁業という枠組みを越えた少子化や地球規模の環境変化といったものが根底に存在する問題だからであり、解決はほぼ不可能に近い。これを前提として考察をおこなっていく。

ここでは考察していく点を二つに絞り考えていく。一つは漁師たちが漁師として生き残っていくための戦略である。

用宗の市場へ保険や市場価値の為にシラスを持ち込むようになったことや、サクラエビのプール制などは、まさに漁師としての生存確率を高めるための制度面での戦略だといえる。特に保険という考え方は豊漁の時には生まれにくいもので、長く不漁が続くから、そして不漁を経験しているからこそ出てくる発想だととらえることができる。また、プール制はサクラエビの保護という面が強く、獲りすぎないことによって水産資源を残し、継続的な漁ができるように調整している。そして一人が大量の利益を得るのではなく、参加者全員がほどほどに利益を得る漁業モデルとなっている。警戒船の仕事自体も平時から存在しているが、不漁時にはそれを増やすことで生計を立てようとすることもまた、生存戦略の一環としてとらえることができる。その一方で、サクラエビ漁における乗組員の集め方や海上でのシラスの受け渡しなど、漁協を介さず、また制度でもない個人的なつながりが

漁師の生活の中に存在している。これらは直接的に利益へと還元するわけではないが、やはり生き残りをかけた戦略の一部だ。

だが先述したように、漁業は斜陽産業であるという定めからは逃れることができない。薩川さんの語りからわかるように、当事者の漁師も仕事を息子に継がせることについては否定的である。ではなぜ、現役の漁師たちは様々な取り組みをしてまで漁師として海に居続けようとするのだろうか。これが二つ目の考察点である。生計を立てるだけなら、陸でも手立てはあるはずだ。

この問いについては、いくつか聞き取りの中にヒントがあるように思える。まず一つは林さんのシラスにリピーターがいることだ。一見金銭的な喜びに還元されそうではあるが、また食べたいと言ってくれることこそが一つの大きな喜びとなっているように感じられた。そしてシラスの薩川さんが漁の時に発した「調子がいい時は（トロ箱に）36 杯とか取れてね。いろいろ大変だけど、こういうのがあるから漁師はやめられない」という語りが、漁師をすることの意味の一端を象徴していると考えられる。漁業をおこなううえでは、漁獲対象がいないところで漁をしても意味がない。だからこそ、魚がいる場所を探すための道具や蓄積された経験がものをいう。しかしこれらを尽くしても、生活していけるだけの漁獲量が得られる保証はどこにもない。準備が功を奏することもあれば、どうやっても魚を見つけることができずどうにもならないときもある。そういった点において、漁師という職業はある種のギャンブル性、言い換えれば不確実性を持つ。

ここで不確実性という要素について、人類学者の A.アパドゥライが『不確実性の人類学』で展開する議論を参照したい。

アパドゥライによれば「不確実性」は確率的に導き出せない事象であり、結果は未知だが確率は導き出せる「リスク」とは明確に区別されてきたという。そのため資本主義の中にリスクは組み込まれてきた一方、不確実性は計算や計測が不可能なために現代資本主義を分析するうえでほとんど忘れ去られてきた。しかし金融市場を生きる人々には、しばしばリスクという計算可能性を超えて装置をうまく活用し不確実性に賭ける「不確実性の想像力」が働いてきたとする（アパドゥライ 2020：76-80）。

また、アパドゥライは人間とそれ以外の自然の境界線が変化し続け、関係的かつ生気的なエコノミー（経済的なもの）として長い間組織されてきたことを指摘している。すなわち人間は変化し続ける非人間的世界との関係の中に位置づけられるのであり、物質や環境などと人間の複数の関係性に存在する不確実性を生きていくという在り方を、アパドゥライは「意識の政治」と呼ぶ（アパドゥライ 2020：219-221）。

このような不確実性のもとに生きる人々の在り方は、シラスやサクラエビをはじめとした対話不可能な生物や天候・海の状況といった不確実性を持つものを相手にする漁師たちの姿と通底する部分がある。そこでは前述したように経験則に基づいた道具の準備や予測が頼りであり、これらを用いて魚や海や道具・船の調子といった『不確実なもの』との関係性が生み出す不確実性との対話、すなわち意識の政治が生まれる。その結果として、河

本さんや薩川さんの例のように「シラスが獲れないときにはあっさりと漁をやめてしまう」といったいわば損切もおこなわれる。しかし不確実性との対話を成し遂げ、『漁獲』や『ほかの人間との関係性の構築』という成果を上げたときに感じる喜びもまた、同時に生まれる可能性を漁は持っている。これこそが薩川さんの「これだから漁師はやめられない」と言わせるに足るものなのではないだろうか。そしてここで感じる喜びとは、直接的に経済的な利益や成果に必ずしも還元できない「やりがい」とも呼べる精神的な充足に近いものであると考えられる。こうして不確実性との対話を通じて得られる充足感こそが、不漁をはじめとしたさまざまな逆境に立たされ、儲からないと言いつつも漁師たちを海へと駆り立てるのではないだろうか。

そして漁協が管轄する限りの海を仕事場として見る以上、陸における興津という括りでは漁師を考えることはできない。漁師たちが意識している所属も「清水漁協に所属する漁師」という興津を越えたものであったが、それ以上に漁師たちは海という一見して境界線のないフィールドを相手にしている。加えて、彼らにとって魚を獲ることは収入を得るために不可欠である一方、水産物を陸にいる人々に売ることもまた仕事として不可欠であるために、仕事の中に日常的な海と陸の往還が生まれている。このような往還を繰り返しながら生活を営むために、一般の人に比べれば漁師の海と陸の境界線ははるかに曖昧になっていると推測できる。

しかしながらそのなかでもやはり収入源である魚介類を重視するがために、早朝や夕方から漁が始まったり、時期によって漁獲対象や仕事の量が極端に変わったりと海の時間や季節に合わせた生活が営まれている。それは陸に住む我々から見れば大変にも見える一方、陸の仕事では得ることのできない、漁師たちをとらえる確かな魅力が存在しているのだと考えられる。

6　おわりに

本章では、漁師たちが興津という狭い地域にとらわれず様々な仕事を駆使し、不漁などの逆境に立たされながらも漁師であろうとする姿をみてきた。

今回聞き取りをした人々はみな現在も漁師を続けている人たちであり、漁師をやめた人々への聞き取りは十分ではない。そのため漁師を続けるか否かの選択をわけたものを見つけることは難しいが、続けるという決断のなかにあったのは、漁師として生き残ろうとする意志と海という不確実性の塊とのやり取りのなかで少なからず存在する「やりがい」であった。そしてこういった思いが漁師のなかで共有されているからこそ、用宗の市場を最大限に活用し、漁の中で互いの物資を運搬しあうなどの互助的な動きが見られているのだろう。興津に住む漁師たちを取り巻く状況は依然として多くの問題を抱えているが、漁

師みんなで生き残ろうとする戦略や取り組みが功を奏し、自分が調査時に惹かれた漁師の陸にとらわれない生活が続いていくことを願う。

7　謝辞

本調査に当たっては、大変多くの皆様にご協力いただきました。貴重なお話をたくさんいただいたにもかかわらず、そのすべてを活用できないことは痛恨の極みであり、心からお詫び申し上げます。しかしながら個人的な経験という側面では、皆様から聞かせていただいたお話は大変貴重な経験となりました。略儀ながらこのような書面にて、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

アパドゥライ,アルジュン
　2020　『不確実性の人類学―デリバティブ金融時代の言語の失敗』以文社。
興津地区誌編集委員会編
　1992　『興津三十年誌』興津地区まちづくり推進委員会。
川口円子・仲田均・海野志保子
　2013　『駿河湾桜えび物語～駿河湾の名物 120 年の歴史を紐解く～』公益財団法人 静岡県文化財団。